
東方小説(仮)

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方小説（仮）

【Nコード】

N1638Z

【作者名】

CROW

【あらすじ】

ルートごとに設定が異なる主人公の話です。

第一話

13年前

紫「この子は一体何者（何か素質があるわね、しかも妖怪）」

紫音「こ、此処は何処」

彼は記憶喪失だった。しかし名前と言葉は覚えていた。そして日本刀を持っていた。

紫「名前は何」

紫音「紫音」

紫「親は」

紫音「いないよ」

紫「じゃあ私が親になってあげるわ」

そして現代

「もうすぐか」

彼は人里へ向かっていた。

？「ねえ、食べていい？」

「ん」

後ろからルーミアが来たのだった。

ル「食べていい」

「それじゃあ奢ってやるよ」

そして人里

門番「あ、紫音君通りたまえ」

彼は寺子屋へ通っていたので知り合いだった。

門「そいつは」

「こいつも一緒だ」

門「まあいいだろう、くれぐれもそいつから目を離すなよ」

？「見て妖怪だわ」

人々が口々に小声で言っていた。

そしてとある食堂

「いつもの奴、あとこの子にも」

店員「ああ分かった」

1時間後

「そう言えば名前は？俺は八雲紫音」
ル「ルーミア」

「また会おうか」

そして帰った。

第二話

ルーミアは昔異変を起こして封印されていた。しかし封印の札である赤いリボンが老朽化していた。

ル「痛い、ぶつかった？」

彼女が木にぶつかった時リボンが破れた。

ル「あ、リボンが」

そして彼女の体は20代ぐらいに成長して、空が暗くなり日光が遮られ、幻想郷は闇に包まれた。

博霊の巫女は異変と思い解決に向かった。今回は紫も来た。

紫「封印が解けた？」

霊「何か心当たりあるの」

紫「あれは500年ほど前、当時の博麗の巫女が命懸けで封印した妖怪、ルーミアと思うわ」

霊「あのリボンで封印してたの」

紫音は異変の原因を見つけた。

「あれはルーミア？」

ル「そう、私よ」

「これが本来の姿」

ル「早く逃げて、もうすぐ力が溢れ出す」

「俺が止める」

すると闇で出来た大量の槍が飛んで来た。彼は急いでかわしたが右肩に刺さった。

ル「ゆつくりと捌り殺してあげるわ」

彼はスベルを使用した。

「刀符」ざんえいけん「斬影剣」

弾幕ではなく刀身が黒く鍔のない日本刀だった。そして再び彼女が

放った槍を高速で斬った。

ル「じゃあ剣には剣で相手してあげる」

そして彼女が黒い大剣を出した。

「ぐ、重い」

ル「この剣は自由に質量と長さを変化できる」

そして彼女が高速で斬った。彼は吹っ飛んだ。

「まさか斬る直前に重くしたか」

ル「正解」

そして再び振り下ろした。しかし彼女の剣が斬れた。

ル「一体何を」

「この剣は闇を切り裂く」

そして彼は彼女に飛びかかった。

ル「え？」

彼は彼女を抱きしめていた。彼女は彼の腹部を貫いていた。

「あが、もう止めろ」

ル「紫音」

その時無数の弾幕が彼女に向かって飛んで来た。しかし彼が庇い背中で受け止めた。

弾幕を撃ったのは霊夢と紫であった。

霊「紫音！大丈夫」

紫「よくも盾にしてくれたわね」

「霊夢、」

彼は倒れた。

紫「霊夢、殺す気で行きなさい」

ル「あ、紫音」

そして激闘を繰り広げた。そしてルーミアがボロボロになって倒れた。

紫「今回は封印じゃなくて殺す」

その時倒れていた紫音が立ちあがった。傷は消えていた。目の色は赤くなり黒い髪は灰色になっていた。顔はよく見えず赤い瞳が奥で

輝いていた。

「クククク、アツヒヤツヒヤツヒヤ」

そして狂ったように笑い出した。歯は肉食動物みたいに鋭かった。

「そろそろ体に馴染んで来たな」

手には刃の根元に赤い髑髏の飾りが付き、刃が真つ赤な大鎌が現れた。

「すまないなルーミア、間に合わなくて」

ル「し、紫音なの」

紫「何者」

その時突然紫の体から血が噴き出した。

「大丈夫、死にはしない」

霊「な、何をしたのよ」

「過程を省略して結果を出しただけだ」

彼の能力は「省略する程度の能力」と「開いて閉じる程度の能力」

で種族は吸血鬼（no life king）であった。

「ルーミア行くか？」

ル「どこへ」

「俺のいた元の世界へ」

彼は父に「相手を見つけるまで帰って来るな」と言われ子供にされ異世界へ飛ばされた事を思い出した。

「一緒にそこへ行かないか」

ル「もちろんよ」

そして能力で元の世界へとつながる扉を開いた。

第三話

紫音が生まれた世界

「親父、約束通り帰って来た」

父「おお、帰ってきたか」

そしていきなりルーミアの胸を掴み揉んだ。

ル「ちよつといきなり何やってんのよ」

父「Dかなかないいい乳dグフォ」

「すまない親父は変態なんだよ」

ル「貴方はどうなの」

「どちらかというと母ちゃん似」

父「息子よ彼女の名は」

親父は何事も無かったかのように言った。

「ルーミアだよ」

父「ルーミアかいいい名前だ、息子をよろしく」

ル「(さっきから視線が胸に行ってるわね)」

数日後

結婚式が開かれた。そしてブーケトスした。掴んだのは・・・

？「(^^)おっ」

ル「誰・・・」

？「どうも執事長のナイト・ホライゾンです」

黒い髪で赤い瞳の執事だった。

その夜

「やるか」

ル「ええ」

そして1年後

ル「子供の名前決めた」

「ああ思いついた名前は

」

ル「ミアルト・完

第四話（前書き）

天魔はオリジナルキャラです。
紫音の設定も異なります。

第四話

俺は叢雲紫音^{むらくもしおん}14歳だ。家族は姉、父、母が居た。しかし俺はあまり好きではなかった。

事あるごとに両親に優秀な姉と比べられた。俺はそれが嫌で仕方なかった。

そしてある日 学校

「はあ」

？「どうした？ため息なんかついて」

そう聞いたのは山崎博^{やまざきひろし}俺の友人だ。

「姉と比べられるのに疲れた」

博「そうか」

「どうして俺なんかを産んだんだ」

？「おい叢雲」

「はあまたか」

博「この人定期的に決闘申し込んでくるNE！」

彼は赤山徹^{あかやまとおる}剣道部部长で定期的に決闘を申し込んでくる。

徹「今度こそ入部してもらうからな」

俺は習い事で剣道をやっているので部活をやる必要が無い。

そして体育館

徹「セイツ」

「毎回動きが単純なんだよ」

そして俺の竹刀が徹の胸当てに当たった。

徹「またか」

「じゃあな」

その帰り道

「いつ諦めるんだあいつ」

博「引退するまでじゃないか？」

別れて数分後

「何か見られてる気がするな」

その時足下にスキマが開いた。

「?（これは紫のスキマだと!夢だな）」

幻想郷

妖怪の山 天魔宅

?「誰か庭に倒れてる」

天魔 黒羽舞くろはねまいは庭で気絶していた紫音を見つけた。
舞「一様中に入れておきましょう」

数分後

「知らない天井だ」

目を覚ますと俺は和室にある布団で寝ていた。

舞「起きましたか」

そして背中に黒い羽を生やした黒い髪の美少女が俺を覗き込んでいた。

「ああ夢か」

舞「現実です」

でこピンされた痛ああああい

「あの、顔が近いんですが」

舞「あ、すみません」

「それより貴方は誰ですか?俺は叢雲紫音です」

舞「天魔の黒羽舞です」

「此処はどこですか」

舞「ここは幻想郷の妖怪の山ですけど?まさか外来人ですか?」

どうやら本当に幻想入りらしい。しかしこのキャラは知らないな。

舞「行くあてが無いなら住んでいいですよ」

「俺男ですよ」

舞「大丈夫です襲つたら引き裂きますから」
そして居候になったのであった。

第五話

俺は空いていた部屋で寝ることになった。

そして夢を見た。

最初は3年前のことだった。

母「どうして貴方は紗枝（姉の名前）と違って出来ないの！」

父「少しは紗枝を見習え！」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

そして去年剣道の県大会に優勝した時

「県大会優勝したよ！」

母「今忙しいのよ」

「・・・（チツ）」

全然関心を持ってくれなかった。

半年前

紗「お母さん、医大に合格したよ」

母「凄いじゃない！」

父「それに比べてお前は・・・」

「・・・」

姉のときは凄い褒めていた。

3日前全国大会の時

「3位だったよ」

母「今忙しいのよ、後にして」

「夕飯出来たら呼びに来て（畜生！）」

そして午前2時ぐらいに目が覚めた。

「ああああ何だよもう」

舞「どうしたんですか？ 魔されてましたけど」
舞が来た。

「起こしたかすまない」

舞「何か悪い夢でも見たんですか？」

「俺、生きてていいのか」

そして姉のことなどを話した。

舞「そうですか」

「俺は駄目だ」

舞「そんなことありませんよ、そんなカスみたいな親の事なんて忘れたらどうですか？」

舞がそう言った。

「わかったもうそのことについて考えないよ」
そして舞が出て行った。

その頃山のどこか

？「あの若造に山を任せられるか」

？2「ではどうしますか」

？3「クレーダーを起こす準備が整いましたいつでもいけます」
？「いつも用意周到で助かるよ、君」

次の日

舞「今日は仕事が無いので山を案内します」

「分かった」

家をでてしばらく歩いていると、誰かが見ていた。

？「これは大スクープになりそうです」

舞「文さん、カメラを渡して下さい」

文「あやや、見つかってしまいました」

舞「Hurry！」

文「ス、スミマセンスグニワタシマス」

文は舞にビビってカメラを渡した。

舞「では行きましょうか」

「ここは、町？」

舞「天狗の町ですから」

？「おや、舞ちゃんそっちの奴は彼氏かい？」

誰かがそう言った。彼女は顔を赤くした。

舞「そ、そんなんじゃないありません！行くあてが無いようなので住まわせてるだけです！」

「そう見えるのか」

舞「・・・」

バシッ

そう言うのと叩かれた。

「痛あああい！！」

次は河童の住居区に行った。

そして河城と書かれた小屋があった。そして中から帽子を被った少女が出て来た。

に「あんたは天魔かい？それに人間が居る」

舞「外来人の叢雲紫音さんです」

に「私は河城にとり、よろしく」

「こちらこそ」

その後色々な場所を回った。

舞「ちよつと用事を思い出したので先に帰ります」

そして地図を渡して、飛んで行った。

「ピンクか」

50分後

ドガアアン

舞「何事ですか」

天狗「クーデターです」

その音は紫音の所まで聞こえた。

「あ、あそこは舞の家」

俺は急いで向かった。

黒羽邸

天「クツここまでか」

舞は能力を上手く使いこなせず、力も弱かったので苦戦した。

俺は家にたどり着いた。そこでは天狗達が戦っていた。俺は倒れていた天狗の刀を手に取り向かった。

舞「離してください」

天「殺すのが勿体ないな」

「舞」

俺は舞に近づく天狗達と戦っていた。しかし力の差は大きく追い詰められていき、右肩に槍が刺さり、右足を踏みつぶされ、腹を刺された。

「グハッゲボ」

舞「し、紫音さん！」

天「お前こいつが好きなら行っておく、こいつは子供が産めないんだよ、とんだ欠陥品だ」

衝撃の事実を知らされた。

舞「よくも彼を」

一瞬舞が消えて彼らの背後にたった。彼らは全員倒れた。

その時援軍が来てクーデターに参加した天狗達が捕まって行った。

「俺は役に立て・・・たか」

舞「しっかりして下さい！」

天「成功率は低いが一つだけある」

舞「教えて下さい」

天「それは人を辞めることになるがいいか少年？」

「やるよ、俺ゲホッ舞とずっと居たいし」

俺は意識を失った。

天「じゃあ始める」

そして何人かが集まり何か札を彼に貼り何かの呪文を唱え始めた。
そして彼の体が一瞬光った。

天「成功だ」

目を覚ますと昨日俺が寝た部屋で舞が近くに座っていた。

舞「起きましたか」

「舞」

そしていきなりキスされた。

舞「お礼です」

「お礼でそんなことしていいのか」

舞「あ、あと好きです」

「は？」

舞「貴方は命の恩人です」

「それだけで？」

？「私からもお願いします、舞を貰って下さい」

舞「お母さん！」

突然現れた舞の母がそう言った。

舞「こんな私を貰ってくださいか」

「もちろん」

今度は俺がキスした。

舞「これから一緒です」

「ああ何があっても悲しませない」

そして二人は抱き合った。

母「ごゆっくり」

母は出て行った。

第六話

次の日の晩、博麗神社の宴会へ向かった。そして始めて空を飛んだ。そこには俺が知っているキャラが沢山いた。

霊「誰」

射「彼女は天魔様の黒羽舞です」

舞「貴方が今代の博麗の巫女ですか」

「俺は叢雲紫音」

射「あの、羽ありましたか？」

舞「人間から天狗になりました」

そして2時間後

「オエエエ」

舞「もう限界ですか」

俺は始めてにしては飲み過ぎたので気持ち悪くなった。

舞「しっかりして下さい」

そして帰ることになった。

「ああ真っ直ぐ飛べない」

舞「私に掴まって下さい」

家

俺は風呂に入っていた。

「やっぱりお風呂っていいな」

ガラッ

何と舞が入って来た。

舞「一緒に入っていますか」

「！」

そして俺の隣へ入って来た。あ、下があああバレたら不味いな。舞「どうしたんですか？そんな顔して」

「いや、何でもない」

舞「家族以外の女の人と入るの初めてですか」

「そうなるな」

あ、タオルが盛り上がって来た、うわああああ

舞「あの、その、大きいですね」

彼女は顔が真っ赤になっていた。ほわああああ

「俺、先上がるわ」

布団

「ん？」

舞「一緒に寝ましょう」

布団が二人用になっていた。

舞「寒いですから早く入りましょうか」

「あ、ああ」

舞「もうちょっと寄っていいですか」

「別に」

鼓動が速くなっていた。顔が近い

舞「そう言えば人間卒業したんですね」

「そうなるな」

舞「じゃあ童貞も卒業させてあげます」

「うわはなs」

そう言おうとするとキスされて言えなかった。彼女も結構酔っていたらしい

舞「では」

「くあせdrftgyふじこーp」

1年後

結婚式を挙げた。西洋風だった。そしてブーケトスをした。掴んだのは・・・

？「（ハハ）おっ此処はどこですか？」

全員「誰だお前！」

黒髪で赤い目の執事だった。その時空間が裂けて誰かが出て来た。

? 2 「あ、ナイト」

? 「あ、ご主人様」

? 2 「どうもすみません」

そして消えた。

舞「一体誰でしょうか」

「知るか」

夜

舞「紫音さん」

「何だ」

舞「愛してます」

「俺もだ」

月が二人を照らしていた。

（天魔ルート）・完

第七話（前書き）

今回もオリキャラです。

第七話

俺は幽月紫音^{ゆうげつ}、能力は「距離を操る程度の能力」と「相手を想うほど強くなる程度の能力」で種族は鬼。結構強さには自信があった。

しかし滅多に戦わないので地底ではあまり名前が知れ渡っていない。
「今日は買い物でもするか」

俺は久しぶりに自炊することにした。

「お、ピンク」

帰り道に倒れている黒いセミロングの髪のコスロリとかいう服を着た少女を発見した。そして下着が丸見えだった。

「家に連れて行くか」

そして家に着いて数分後彼女は起きた。

？「此処はどこでしょうか」

「俺の家だ」

？「私は葛葉^{くすは}と言います、弱いけど鬼です」

「俺は幽月紫音、鬼だ」

葛「あの、今から食事作りますか」

「そうだが」

葛「では助けてくれたお礼に私が作ります」

「それは楽しみだ」

数十分後

葛「出来ました」

彼女の作った、食事はとても美味しかった。

「そつえばどうして倒れていたんだ」

葛「話せば長くなりますが実は・・・」

分かったことは、彼女は監禁されていて毎日男どもに犯されていたらしい。そしてやっと抜け出せたらしい。

「そうか」

葛「もう私は汚れてるんですよ」

「此処に住んでいいぞ」

葛「え、いいんですか」

「一人増えたぐらいどうでもいい、風呂沸いてるから先入れ」

葛「では入ってきます」

数分後

「しかし、俺の凄いタイプだなあいつ、料理も上手そうだし」

そして上がって来た。

葛「蓋開いたままなのですぐ入って下さい」

「分かった」

今地底では誰かが地底の情報を地上に漏らしているのが問題になっていた。その正体は葛葉を監禁していた奴らだった。

？「あの小娘に全て着せるか」

？2「それが一番手っ取り早い」

何処かで彼らが話していた。

「すまん、布団1つしかないだが」

葛「え、伸びた？」

俺は能力で布団を伸ばした。

「能力だ」

葛「凄いですね」

そして布団に入った。

葛「男の人にこんな優しくして貰ったのは始めてです」

「そうか」

俺はこれから彼女を守って行きたいと思った。

第八話

朝

「ん、居ない」

葛葉が布団から出ていた。

葛「朝ご飯出来ましたよ」

「お、作ってくれたのか」

彼女は朝食を作ってくれた。

食事中

「お前はいいお嫁さんになれそうだ」

俺はそう言っていると彼女が水を吹いた、あと顔を赤くしてこう言った。

葛「ボフツいきなり何言い出すんですか！」

二時間後

誰かが来た。

？「おい居るか」

戸を開けると何人かの鬼がいた。

「居るよ」

？「こいつを探してるんだ」

そして写真を見せた。何と葛葉だった。

「こいつがどうした」

？「それがこいつが地上に情報を漏らした奴らしい」

そんな馬鹿な。

「知らないな」

その時葛葉が来た。最悪のタイミングだ。

葛「どうしたんですか」

？「こいつだ」

「葛葉逃げるぞ」

葛「え」

俺は葛葉をお姫様抱っこして秘密の抜け道を通って外へ出た。
数分後 町の外れ

「お前が此処の情報を漏らした犯人だと思われる」

葛「私は違います、そんなことする勇氣なんてありません」

「そうか」

葛「疑わないんですか」

「俺はお前を信じる」

？「見つけたぞ」

見つかつたらしい

「逃げるか」

別の場所

？「上手くいったな」

？2「そうだな」

？3「あんた達かい情報を漏らしてたのは」

？「お、お前は星熊勇義」

勇「逃がさないよ」

妖怪達「おい碎雅さんが来た」

彼はこの一帯で一番強い鬼だった。そうだ、作ってから使っていない
スペルカードとかやらを使おう

碎「おい悪いことは言わない、そいつを渡せ、お前らは離れて見て
いろ」

「葛葉、下がってきてくれ」炎の獣「」

そして俺はスペルカードを使った。すると体が変化した。こんな

感じ <http://www.1999.co.jp/itbig16/10166761b.jpg>

葛「・・・どうしてこうなった」

「ガアアア（喋れない）」

そして碎雅が殴ろうと突っ込んで来た。そして俺の拳とぶつかった。かなりの衝撃波が発生した。

見ていた妖怪達が吹き飛んだ。

碎「何、指の骨が折れただと（あいつら離れてろって言ったのにな）」

「（ん、この尻尾使えるな）」

俺は巨大な尻尾を振りまわし彼に攻撃した。しかし受け止められた。

碎「そおれ」

尻尾を掴まれた俺は投げ飛ばされたが、空を飛べたらしく宙に浮いていた。

「（口から火が出るかな）」

その時彼がジャンプしてパンチしようとした。俺は彼の腕を掴み強く握った。

碎「グッ」

そしてミシッといって潰れた。

「グガアアア」

俺は彼を全力で殴った。彼は吹っ飛んだ。

？「そこまでだ」

そう言ったのは勇義だった。彼女の近くには縄で縛られた5人の男が居た

妖怪「勇義さんどうしたいきなり」

勇「真犯人見つけたんだよ、こいつらが全部白状した」

「それは良かった（変身が解けた）」

碎「もうだめぽ」

「帰るか」

葛「はい」

夕食後

「俺はお前が好きらしい」

俺はさりげなく告白した。

葛「え、前にも言ったように私はもう汚れきってます、あと事故で子宮を無くしたんですよそれでもいいんですか」

「大丈夫だお前はいい奴だ」

葛「そうですか、嬉しいです」

そしてこれからずっと一緒に暮らすことになった。

（完）

第九話

俺は叢雲紫音^{むらくもしおん}18歳、気が付くと長い階段で寝ていた。

「あれ、さっきまで昼寝してたのに」

近くには刀が落ちていた。名前は「桜楼剣」で刀身が若干桜色だった。

その時

？「動くな」

「？」

後ろから声がした。そこには日本刀を持った白い髪の少女が居た。近くには半透明の煙のような物体が浮いていた。

「ここどこだ」

？「黙れ侵入者」

そしていきなり斬って来た。俺の家は剣道の道場で小さい頃からやっていた。俺は受け流すのが得意だった。

「行けるか」

俺はその剣で受け止めた。そして刃を滑らし受け流した。彼女の剣は勢いで手から離れた。

？「あ」

？2「そこまでにしときなさい」

その時上から髪が桜色の女性が降りて来た。ふつくしい

「すみません、此処どこですか」

？2「あら、外人人？」

「外人人？」

彼女に訊くとそう言った。

？2「ここは貴方が居た世界と違う場所よ、貴方名前は」

じゃあ俺神隠しにでも遭ったのか。

「叢雲紫音です」

？2「私は西行寺幽々子で向こうは魂魄妖夢（紫音？彼と同じ、え

「彼って誰？」

幽「その刀は」

「気が付くと落ちてました桜楼剣らしいです」

幽「行くあて無いんだったら此処で暮らしていいわよ、妖怪に食われたらあれでしょ（何か聞いたことあるわね）」

は、妖怪？そんなものが居るのか

「こんな見ず知らずの奴を泊めていいのか」

幽「いいわよ悪い人じゃなさそうだし」

妖「あれ、私無視ですか」

「じゃあお言葉に甘えて」

妖「何かあつたら斬りますよ」

襲うと思ったのか、俺にはそんなことする根性なんてない

翌朝

「夢じゃなかったか」

？「始めまして、八雲紫です」

いきなり空間が裂け金髪の女性が出て来た。

「うわ何だいきなり」

紫「私が此処へ連れて来たのよ」

「何だって」

紫「貴方には「騙す程度の能力」があるわ」

何、能力だって。

紫「じゃあ私はこれで」

そして消えた。しかし、胸大きいな。

妖「紫音さん朝食の準備出来ましたよ」

「ああ、今行く」

朝食後

今日は庭の掃除をやらされた。そして大きな桜の木を見つけた。

「ん、いきなり頭痛が」
そして意識を失った。

第十話

そして夢を見た。テレビとかで言ってた前世の記憶という奴だった。

俺は桜木紫音種族は人間で西行寺家の娘の婚約者だった。能力は「能力が聞かない程度の能力」だった。

そして今日は家に行った。

？「ああ、紫音殿来たんですか」

彼は魂魄妖忌で此処の門番をしていて半人半霊という種族だ。

幽々子の部屋

幽「あら、紫音来てくれたの紫もいるわ」

一時間後

幽「いよいよ3日後ね」

「そうだな」

結婚は3日後だった。

幽「じゃあね」

この時俺は彼女が能力について深刻に悩んでいるのに気付けなかった。

「いよいよ3日後か」

そして2日後の夜

俺は幽々子の部屋に来た。しかし彼女は居なく書き置きがあった。

「これは」

紙にはこう書いてあった。

やっぱり私のこの人の命を奪う能力に耐えられません、でも好きでした。貴方にはもつといい人が居る筈です、さようなら紫音 西

行寺幽々子

紫「紫音、大変よ今すぐ来て」

そしてスキマに落とされた。

「そ、そんな」

幽々子が大きな満開の桜の木の下で胸を短刀で刺して死んでいた。

俺はすぐさま彼女の亡骸へ駆け寄った。

紫「あ、それ以上近づいたら」

「さよなら、幽々子」

そして既に冷たくなった幽々子に口づけした、この桜からは妖気が溢れていた。そして何か声が聞えた。

？『ハハハ、この娘の能力は凄いな死んでくれてありがとうよ』

その言葉に怒った俺は木に刀を突き刺した。

「黙れ」

？『その程度で我を倒せるとも思ってたか、何！力が弱まった、グ、その刀はかなりの代物か』

そして何度も刺すと花びらが半分以上散り、声が聞えなくなった。

妖「すみません紫音殿、止められなくて」

妖忌が謝った。

「気にするな済んだことだから」

紫「ちよつと封印するから下がってて」

「紫、後は任せた」

彼は帰って行った。彼の眼は涙で溢れていた。

その後

紫「彼、もう長くなさそうね持って半日ぐらいかしら」

妖「この桜が関係あるのですか」

その後紫音は刀を売り払った後衰弱死した。

その頃の幽々子

紫「彼のこと知りたいかしら」

幽「知ってるの」

紫「じゃあ貴方の彼に関する記憶を元に戻すわ」

幽「え、彼は生まれ変わりですって・・・え婚約者、もう何が何だか」

記憶が戻った彼女は困惑した。

紫「纏めると貴方は彼の前世と婚約者」

幽「そうだったの」

その後真っ白な空間に居た。そして黒い影みたいなものが居た。

？「俺と同化してくれ」

そして彼の記憶や知識を手に入れた。その後すぐに目の前が眩しくなった。

その後目を覚ますと縁側で幽々子に膝枕されていた。

幽「起きた」

「幽々子」

幽「昔のことを思い出したわ、貴方の前世は私の婚約者ですって」

「俺もだ」

幽「本当？じゃあ私の好きな花は」

「桜」

幽「正解よ、信じるわ紫音、愛してる」

「俺もだ幽々子」

そしてその夜 西行妖

？「やっと実体化できたか」

桜の木から誰か出て来た。姿は紫音とそっくりだが声が違った。

そして木の周りの結界を刀身が真っ黒な剣で切り裂いた。

そして紫はすぐ様二人の元へ向かった。

紫「不味い、結界が破れたわ幽々子」

「じゃあ、俺が行く」

？「その必要は無い」

その時声がした。そこには俺とそっくりな男が居た。

「向こうから来たか」

幽「あ、」

「しまった」

？「あの桜の前で待ってる」

何と彼女が彼に捕まった。そして彼はすぐ消えた。

幽「離しなさい」

「幽々子、今行く」

そして俺は桜へ向かった。

？「来たか」

彼女は地面に打った杭に縛り付けられていた。

幽「紫音！」

「行くぞ」

？「遅い」

幽々子視点

数分後彼が来た。そして戦い始めた、しかしなかなかあいつに攻撃出来なかった。

？「今だ」

その時彼があいつに刺されて倒れた。

私「嫌あ、紫音！」

？「ハハハ弱いんぐハッ何、刺されただと」

「どこを見てる」

なんとさっきまでの彼は幻覚みたいなものだったらしい。いつの間
に？

終了

？「グ、何をした」

「お前はずつと騙されていたんだよ」

？「しかしまだだ」

すると俺と奴は白い空間に居た。奴の腹の刺し傷も消えた。

？「大丈夫、女は解放した」

そしてしばらく奴の攻撃をかわしたり攻撃したりを繰り返した。

？「つまらん、さつさと死ね」

「死ねるかああああ」

その時桜楼剣が光り輝いた。そしてあの黒い影が出て来た。

？2「俺も手伝う」

そして二人で持つて彼に突き刺した。

？「無駄だ、すぐ再生する、何？体が崩れて行くだ」と

奴の体は桜の花びらになり崩れ始めた。

？「しかし、これで終わらんお前らもこの空間ごと消えるのだハハ」

そして完全に崩れた。

「ヤバイどうしよう」

？2「奴を打ち破ったその刀なら行けるはずだよってみろ」

「おう、わかった」

そして刀で何度も切り付けた。そして数分後ついに罅が入った。しかし空間の崩壊が始まった。

「やつと壊れた」

？2「早く行け」

そして俺を押し出した。

？2「俺にはもう一つ能力があるそれは「種族を変える程度の能力だ」それでお前を亡霊にした。後、幽々子とずっと幸せに暮らしてやれ、じゃあな」

そして彼は空間と一緒に消滅して、目の前が明るくなった。その時紫が出て来た。

紫「早く来て」

「助かったよ紫」

俺は彼女と一緒にスキマで幽々子の元に帰った。

第十一話（前書き）

少しエロ注意

第十一話

幽々子は桜の前で待っていた。

「幽々子帰って来たぞ」

幽「よかった無事で」

数日後結婚式が行われた。沢山の幽霊たちが集まった。

幽「やっと挙げれたわね」

「何年経ったんだ」

紫「千年くらいかしら」

遠くから射命丸が写真を撮っていた。

文「相手は誰でしょうか」

その夜

「熱いな」

俺は風呂に入っていたそして戸が開き幽々子が入って来た。

幽「入るわよ」

「（＾　＾）」

数分後

幽「背中、洗って」

「分かったよ」

そして彼女の背中を洗った。どうしてこうなった！

幽「次は私が洗ってあげる」

「え」

幽「ほら、座って」

洗って貰っていると柔らかい物が当たっていた。そう、彼女の胸である。

「（おっとヤバイ下がああ／（＾　〇　＾）＼）」

幽「どうしたの、あつちよつと紫音下が・・・」

「嫌ああああ見るなああああああ」

彼女に見られるという最悪の事態が起きた。

幽「そんな大声出さなくてももう夫婦なんだし」

「抱きつくな、またうわあああ」

幽「あら、これがいいのかしら」

何と彼女が下を手で触り始めた。ヤバい先から・・・

「あ、ああ」

幽「そんなに気持ちよかったの」

彼女は飛び散った「バキューン！」を洗い流した。

そして寝る部屋

「ん、二人用になつてる」

幽「一緒に寝るのよ」

嫌な予感がするな。

そして真夜中

「お腹が重い」

お腹が重くて起きると彼女が乗っていた。

「何d」

喋ろうとしたら彼女の唇で塞がれた。

幽「始めましょう紫音」

「ギャアアア」

そして童貞卒業した。

次の日

文の新聞「文々。新聞に「白玉楼の主、西行寺幽々子結婚！相手は謎の男」と書かれすぐさま各地に知れ渡った。

（幽々子編・完）

第二二話

昔、鬼が山に居た頃

俺は鉄紫音人妖大戦で唯一生き残った妖怪で「あらゆる金属を創り出し操る程度の能力」と「種族を変える程度の能力」の二つの能力を持っていた。そして前者の影響で体が金属に出来るようになっていた。

そして今は妖怪の山へ来ていた。そして一人で月を見ながら酒を飲んでいる、髪の毛の長い小柄な鬼を見つけた。

「おい、一人か」

？「誰だ？見かけない顔だね」

「俺は鉄紫音だ、君は？」

？「四天王の一人、伊吹萃香だ」

こいつがこの山の四天王か、しかし可愛いな。

萃「どうかした、ジロジロ見て」

「いや、可愛くて見とれてしまった」

彼女は顔が真っ赤になっていた。

萃「そう言われたの始めてだよ」

それから仲良くなった。

数日後

俺は酒に弱く彼女と飲んだ時すぐ酔っぱらってしまった

萃「こいつ酒弱かったのか、しっかりしな」

「黙ってて悪かった」

萃「そう言えばお前強いのか」

「結構強い、お前よりは年上だ」

萃「じゃあ明日勝負だ」

翌日

萃「じゃあ行くよ」

「かかって来い」

そして彼女がパンチした。そして俺を貫いた。

萃「何だこれ」

傷口からは血ではなく銀色の液体が流れ出て、彼女の体に巻き付き動きを封じた。

「俺は金属に出来る」

萃「でも無駄だよ（この巻き付け方エロいな）」

彼女は霧になって抜け出した。

「厄介だな」

そして俺は妖力を増やした。

萃「何だいその妖気は鬼神よりあるじゃないか」

「じゃあ行く」

俺は鉛で巨大な拳を創り彼女に殴りかかった。

萃「でかいだけじゃ無理だ」

そしてぶつかつた。彼女は2mくらい吹き飛んだ。流石は力自慢の鬼か、鬼じゃなかったら潰されてたな。

萃「降参だ（強い男も悪くないか）」

彼女は負けを認めた。その後数年間かけて惹かれあって行った。

そして現代

俺は70年前幻想郷に来た。

そしてある日

？「あ、紫音」

後ろから声が聞え、振り返ると

「萃香？」

月明かりに照らされた萃香の姿があった。

萃「久しぶりだね」

「地底に行ったんじゃないかったのか」

萃「途中で出て来た」

じゃあ連れ戻しに来る可能性もあるか。

「萃香」

萃「何だ」

「好きだ」

思い切って告白した。今言わないと後悔しそうだ。

萃「紫音、言うの遅いじゃないか」

「ごめんなそっち関係に疎いんだよ」

萃「じゃあファーストキスとかやらをやるよ」

そしてキスされた。

地底

鬼神が命令していた。

？「じゃあ今から連れて帰って来い」

鬼達「分かりました、では行つて参ります」

そして10人の鬼が地上へ向かった。

第一三話

次の日

？「萃香、やっと見つけた」

萃香は鬼に見つかった。

「鬼？」

萃「勇義どうして此処に」

勇「お前を連れ戻しに来た」

萃「どうしていきなり」

勇「上からの命令だ知らないよ理由なんか」

萃「こいつも連れてきていいか」

勇「好きにしる行くよ萃香」

そして地底

？「帰って来たか」

勇「一人増えました」

？「ハハッやつと奴に春が来たか」

数年後

住む場所が見つかって普通？の生活をしている。

「ん、なんか頭が」

媚薬を盛られたようだ。

萃「によほほ」

「うわああ離s」

そして一回やってから寝た。

（萃香編・完）

第一四話（前書き）

フランが存在しないという設定です。

第一四話

俺は赤月紫音^{あかつきしおん}19歳、幼い頃家を放火されて両親を殺されてから祖父の家で暮らしていた。

ある日の夜

祖父「おい、足下に」

「え、うわあああ」

突然足下に開いた空間の裂け目に俺は落ちて行つた。

祖父「出て来い、居るんじゃない」

？「ばれてたの」

祖父がそう言うのと彼の近くに裂け目が開き、そこから金髪の女性が出て来た。

祖父「何年ぶりだ」

紫「50年くらいね」

祖父「どうして紫音を」

紫「それより記憶を消した筈」

祖父「そんなことしたか」

紫「効いてなかったの」

祖父「それでどうして連れて行つた」

紫「彼は能力者よ」

祖父「じゃあ今生の別れか」

紫「じゃあ、さよなら」

幻想郷

紅魔館

紫音は庭に転がっていた。

レ「誰、こいつ外来人？」

咲「どうしますか」

レ「部屋に連れて行きなさい、此処で死なれたらあれでしょ」
咲「かしこまりました」

レミリアは彼の様子を見に行った。

レ「寝てるわね」

「・・・して」

レ「寝言かしら」

「どうして逝っちまったんだ父ちゃん、母ちゃん」

レ「彼、まさか」

その時彼の手が彼女の羽の根元を掴んだ。彼女はこの部分が弱かった。

レ「ひゃん、ちょっと、揉まないで、らめえ」

そして彼女はぐったりしてベッドの上に倒れた。

朝

彼はベットから転げ落ちレミリアの上にのしかかった。

レ「寝相悪いわん!」

その時唇が当たってキスしてる状態になっていた。

咲「お嬢様此処にいましたkお嬢様に何を」

そして咲夜が来てしまった。彼女はナイフを取り出した。

レ「咲夜、止めなさい、様子見てたら寝てしまっただけよ（ファーストキスが）」

咲「ですが」

レ「止めなさい!」

咲「分かりました（後で絶対・・・）」

「ん、どこだ此処」

俺は羽の生えた少女の上に居た。

レ「落ち着いて」

「あ、すみません寝相が悪くて」

レ「私はレミリア・スカーレット彼女はメイドの十六夜咲夜」

「俺は赤月紫音」

レ「此処は紅魔館よ、それで私は吸血鬼（赤月紫音？彼と一緒にじゃない）」

はあ？こんな美少女が吸血鬼だとお、ふざけるなー！

数時間後

色々あつて俺は此処の地下にある図書館で働くことになった。

そして床を掃除しているといきなりナイフが右肩に刺さった。

「！」

咲「・・・」

そしていきなりメイドの咲夜が現れナイフを数本投げた。ナイフは腹部に全て刺さった。

「ガ」

そして背後に一瞬で移動し背中にもナイフを数本刺した。

「ア、ガ」

そして心臓の近くを刺された。

「（もう死ぬのか）」

だんだん意識が遠のいて来た。

そして完全に意識を失った。

しかし気が付くと白い空間にいた。目の前には赤いゴスロリを着た黒いセミロングの女性が立っていた。

？「久しぶりね」

「は、誰」

？「あ、記憶消してたの忘れてた」

そして俺の頭に手を乗せた。そして色々な記憶が出て来た。

俺の前世は神が間違つて死なせてしまった悪魔で、俺は普通の人間に生まれ変わっていたらしい。

そして彼女がその神らしい。

「あ、思い出した確かお前は有紀^{ゆうき}」

有「悪魔に戻すわよ、起きたら戻ってるわじゃあね」

そして目を覚ますと傷は消えていて強大な魔力を持っていて能力は「探す程度の能力」と八雲紫と同じの「境界を操る程度の能力」を持っていた。

「いつ見てもこの館は赤い」

その頃

外の何処かの教会では昔から幻想郷を調べていた。そして行き方をあみだすまで長い時間がかかった。

？「赤い館に居る吸血鬼を殺して来い、生け捕りでもいい、殺したら証拠に写真を撮って来い」

そして5人のヴァンパイアハンターと3人の術者をを日本のある荒れ果てた神社に送った。

そして神社で術者が地面に模様を描き呪文を唱えた、すると神社の前の空間が裂けた。

術「では私たち2人は此処で待っています」

術者の1人はヴァンパイアハンターに着いて行った。

そして紅魔館を探した。

？

紫「あら？結界が壊れてるわ、直しておかないと」

紫はすぐ結界を治した。

第一五話

紫音はレミリアを昔助けたことがあった。そして彼女の初恋の人だった。

レミリアの部屋

レ「（この魔力はまさか・・・行ってみようかしら）」

地下

パ「何、私より大きい魔力？え貴方は・・・」

髪の毛が紫の少女が来た。

「どうやら俺は悪魔らしい」

その時レミリアが凄い勢いで飛んで来た。

レ「紫音！やっぱりあの時の悪魔だったの㏸あきやあ」

一瞬ピンクの何かが見えて目の前が真っ暗になった。息苦しかった。まさかレミリアの・・・

レ「あれ？どこ」

パ「下よ」

彼女は彼の顔の上に乗っていた。

レ「ひゃん、舐めないで」

パ「早くどけたら」

レ「あ」

「（^ ^）」

パ「何その顔」

「久しぶりだなレミリア」

レ「会いたかったわ紫音、じゃあ私は部屋へ戻るわ」

この時俺は着いて行けばよかったと思う羽目になるとは思っても居なかった。

少し前、ヴァンパイアハンターは紅魔館に着いていた。
美「？」

美鈴は5人のうちの1人の「眠らせる程度の能力」により眠らされた。

咲「誰」

咲夜も同じように眠らされた。

レミリアは部屋へ向かう途中に彼らに出会った。

レ「誰よ侵入者」

男「これでよし（俺の能力って凄いな）」

彼は封じる程度の能力を持っていて、彼女の力を封じた。

レ「5人くらい余裕なつてあれ力が出ない」

その後薬で眠らして生け捕りにした。かかった時間は10分くらいだった。

そして再び外へ向かった。空港では術者がレミリアを入れたバッグを弄ってばれないようにした。

数時間後

紅魔館

咲夜が大急ぎで図書館に入って来た。

咲「大変です、お嬢様が何処にも居ません（え、殺した筈）」

パ「何ですって」

「場所は特定した」

そして俺はその場所へとつながるスキマを開いて、飛びこんだ。

出た先は教会だった。

そして俺は地下牢辺りを探した。

そして一番奥から声がした。

？「嫌あ、止めてきやああ」

男「殺すのが勿体ない」

急いで扉をこじ開けると鎖で脚と腕と首を繋がれたレミリアが男に服を脱がされていた。

男「誰だギャアア」

俺は男の首をスキマから出した剣で斬った。

そして彼女の鎖を魔法で粉々にした。その時紅魔館へ侵入したハンターが来た。

？「動くな撃つぞ」

「レミリア大丈夫か」

レ「大丈夫よ」

「俺はひと仕事してくる」

そしてレミリアをスキマで送った。

？「あいつを何処へやった」

「喋るなとつとと死ね」

俺は全員をスキマで挟んでバラバラにした。

その時地下に彼らの断末魔が響いた。

「司教の部屋はあそこか」

吸血鬼討伐を命じた司教の部屋

その時部屋のドアが吹き飛んだ。

司「？」

「始めまして、そしてさようなら」

俺は無詠唱で爆発させる魔法を使った。俺はすぐスキマに入った。

そして教会は瓦礫の山になった。

紅魔館

「ただいま」

レ「早かったわね（今度こそ紫音に・・・）」

夕食後

俺は一人でベランダで隙間から出したワインを飲んでた。そして後ろから彼女が来た。

レ「ねえ、私紫音のことが好き」

「ブホッな、何だつてえー!」

それを聞いて俺は思いつきりワインを吹いた。

「俺でよかつたら別に」

俺は彼女の小さな体を抱き締めた。

レ「わ、私でいいの」

「もちろん」

三日月の明かりが二人を照らしていた。

その後俺は部屋で寝ていた。そして夜中に目を開けると・・・

「何してるんだ」

レ「一緒に寝ましょ」

レミリアが隣に入っていた。

「（狭い、落ちそう）」

翌朝

俺はベッドから落ちていて上にレミリアが乗っていた。顔が近い。

「早く起きてくれ」

レ「zzzz」

レミリア編・完

バックエンド（前書き）

レミリアが好きな方は閲覧注意

バッドエンド

少し前、ヴァンパイアハンターは紅魔館に着いていた。

美「？」

美鈴は5人のうちの1人の「眠らせる程度の能力」により眠らされた。

咲「誰」

咲夜も同じように眠らされた。

レミリアは部屋へ向かう途中に彼らに出会った。

レ「誰よ侵入者」

男「これでよし（俺の能力って凄いな）」

彼は封じる程度の能力を持っていて、彼女の力を封じた。

レ「5人くらい余裕なっであれ力が出ない」

男「お嬢ちゃんいいことしない」

レ「嫌、止めて触らないでキヤアア」

レミリアは5人に犯された。

1時間半後

俺は彼女の部屋へ入った。

「レミリアえ、嘘だ」

そこで俺は見たのは胸に杭を打たれ、首を切断され、手足をへし折られて死んでいるレミリアの無残な姿だった。

咲「お嬢さま・・・」

男「写真も撮ったし帰るか」

「帰る？笑わせるなお前らは此处で死ぬんだよ」

俺は一人目を刀で切り刻み二人目の首を斬り三、四人目は咲夜に殺された。

男「ギヤアアア」

五人目は俺が同じように切り刻んだ。

そして彼らを送った組織を探して、スキマで向かった。

男「誰だ」

「喋るな」

そして俺はある禁術を使い敷地全体を消滅させた。代償は俺の魂が
跡形も残らず消滅することだった。

「レミリアごめん助けてあげられなくて」

そして俺は消えた。

数日後、紅魔館では咲夜が行方不明になり、美鈴は人里で働きだした、パチュリーはそのまま残った。

第一七話（前書き）

1話で終わります。

第一七話

20年前幻想郷

俺は妖怪の出水紫音風見幽香の夫だ、俺は今幻想郷を危機に陥れた妖怪天野凶と戦っていた。

「これで終わりだ」

凶「離せ」

「これが俺の最高傑作だ」

俺は彼を羽交い絞めにして俺の能力「爆弾を創造する程度の能力」で爆弾を創りそれを爆発させた。紫が強力な結界を張っているのであまり被害は出ないはずだ。

紫「まさかこんなことをするなんて」

吹き飛ぶ瞬間俺はもう一つの一回しか使えない能力「転生する程度の能力」を使った。幽香、絶対に帰るからな。

その後幽香は荒れた。

現代

人間に転生した彼はいつでも妖怪に戻れるのだが、死ぬ前の記憶を失っていた。

ある日

「いきなり頭痛が」

そしてついに全てを思い出した。彼は妖怪に戻った。能力は「闇を操る程度の能力」に変わっていた。

？「見つけた」

後ろから声がしたと思ったら俺は落ちて行った。多分紫か

幻想郷

俺は彼女の花畑に落下した。

幽「誰？貴方」

「（分かってないのか）」

幽「強そうね私と戦って負けたら奴隷よ」

「じゃあ俺が勝ったら俺の物だ」

そう言った瞬間彼女の拳が掠めた。

幽「よそ見していると死ぬわよ」

「（能力でこうやって）」

俺は闇でハンマーを創り彼女の傘にぶつけた。

幽「何それ」

そして傘が折れた。

「貰った」

俺は闇で創った手で握って上へ投げた。

幽「え」

落ちる時に彼女が蹴ろうとした。黒の下着が丸見えだった。

幽「あ、バランスが（こいつ見たな）」

しかしバランスを崩し俺の上に乗った。

幽「死ね！変態」

「無駄だ」

俺は霧のように散って彼女の後ろに立ち闇で縛った。

「おい幽香、俺の顔を忘れたかああ」

そして俺は彼女に抱きつきキスした。

幽「！（この顔見たことがある）」

「思い出したか」

幽「え、貴方名前は」

「出水紫音」

幽「嘘、まさか本物」

彼女は涙を流した。俺は拘束を解いた。

幽「お帰り紫音、遅かったじゃない」

「ただいま」
そして抱き合った。

（幽香編・完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1638z/>

東方小説(仮)

2011年12月28日20時50分発行